

甲状腺外科草子 131 哲人宰相：大平正芳余話④

杉野 圭三

政界進出

大平は1952（昭和27）年10月1日に行われた第25回衆議院議員総選挙に旧香川2区から自由党公認で立候補した。



初選挙運動中（1952）



秘書が大平に「42歳の厄年で当選するかどうかわからないのに何故代議士になろうと思ったのか？」尋ねると「40の厄を迎えて思ったんだ。60歳かそこらまで生きるとすればあと20年。このまま役人生活をするより自分の力で何か世の中のためにできることはないだろうか。そういう気持ちで政界入りに踏み切らせたんだよ」と答えた。（真鍋賢二「私の見た大平正芳―その素顔と姿勢」）

大平は自ら所属する自由党の選挙公約に精通していないばかりか、興味すら持っていなかった。彼は「インフレ抑制・通貨価値の維持が経済発展・道義確立の基礎で、社会秩序維持の前提であり、財政の緊縮整理を断行し“安くつく政府”を作らねばならない」と説いた。多くの聴衆に難しい話をあの口調で説かれても、当然興味・共感を得ることは困難であったと思われる。

彼は選挙活動について次のように述べている。「目先の利益を誇張して宣伝し、有権者の歓心を買うことは卑しいことであり、国民の良識がいつか厳正な審判を下す。民主主義は国民の良識を基調に持ち、無責任な煽動が勝利を民衆の中に永久に打ち立てるようなことがあれば、私の方から民主主義との絶縁をも敢えて辞さないつもりだ」（1953、素顔の代議士）

また、次のようにも語る。

「人間というものは、労苦よりも安逸を求め、生活の低きよりも高きを求めたがるものである。政治がこの人間の本能に迎合して御機嫌をとるばかりでは、その人のため

にならないばかりか、国家と社会を破滅に導くことになる。その破局を避けるためには、人に真実を訴え、困難を説き、それ相当の犠牲を求めなければならない。このことがマッシーニ（19世紀、イタリアの社会思想家）のいう賢明なリーダーシップというものではあるまいか」（青年との対話、1965）

近年の選挙活動をみると口先ばかりの甘言や対立候補の誹謗中傷、SNSを悪用した宣伝を行う与野党の政治屋たちがいかに多いことか。そのような宣伝などに左右される選挙民にも大きな問題がある。

選挙の結果、一位は自由党の加藤常太郎47,356票で、正論を貫いた大平は403,093票の二位、約4000票差の当選であった。三位は社会党の田万広文で36,173票。

代議士生活について大平は「金の事を言えばこれほど金のかかる商売はない。花輪、祝電、優勝旗、祝い酒、事務所の家賃、電話代、自動車賃をはじめ宣伝費、会場費などが待っている。東京では毎日平均十数人の来客がある。秘書一人では仕事がさばけないので、二三人に手伝ってもらわねばやって行けない。多くの陳情や注文に尽くせるだけの手を尽くさねばならないが、一つの成功はそれに数倍する敵をつくることになりかねない。補助金や起債獲得という公共の仕事には、はじめて代議士としての誇りと責任を純粋に感じるが、この仕事とて、予算の制約の下、決して楽ではない。朝は7時ごろから電話が次々とかかる。夜は12時ごろまで呼び出される。ともかくも一人の能力に数倍するサービスが代議士には待っている。われわれ代議士も代議士たる前にただの人間である。自分は平凡な人間であるという自意識であり、進むべき道は人間の倫理という平凡な道しか残されていないのだという諦念である。代議士もまたあくまでも凡骨の人間にすぎないのだから、代議士に向かって常人よりも特に高い倫理水準を求めることもなく、同時に代議士を目して悪徳の権化のように見ることもなく、ただの平凡な一個の人間としてあたりまえに取り扱ってもらいたというのが、平凡な私の平凡な祈願である。民主政治の本体はというのは、元来そういう平凡なものであると思うからだ（一部略）」と語る。

以後、当選11回。「平凡な人間」という自意識を持続できる政治家は貴重で非凡である

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年3月13日